

リンベルク・シュトラッセにて

ラインハルトとキルヒアイスが、新無憂宮の正門から北へ三キロほど離れたリンベルク・シュトラッセに下宿するようになったのは、幼年学校を卒業すべくのことである。

最初、その話題を持ち出したのはキルヒアイスである。帝国暦は四九二年のカレンダーを繰り始めており、すでに月は三月も終わりを迎えようとしていたある一日。ラインハルトが半は本気、半は冗談でキルヒアイスに憤ってみせるところの、『二月だけ年下』の状況をようやく脱した時期でもある。

そして月が明けると間もなく幼年学校の五年次の卒業試験が行われ、彼らは五年間を過ごした幼年学校の寮を後にすることになる。

「差し当たり、住むところが必要ですね」

「ん？」

「こついった点で気がつくことでは、赤毛の少年はラインハルトにはるかに優れている。ラインハルトとは言えば、幼年学校を卒業後に前線任務を希望したのは当然にしても、帝都での住環境の準備など完全に視野の外側にあつたからだ。」

指摘されても、ラインハルトはしばらく親友の言葉の意味がよく理解できないように、その顔を見つめていたほどである。

「住む、ところか……」

「ええ、ここを卒業したら寮からは出なければなりません。官舎という策もあるんですけど」

「官舎だつて？」

自由惑星同盟軍に較べると、帝国軍はあまりその構成員の福祉厚生に意を払わない。特に士官の多くが貴族出身者ということもあって、士官そのものが彼らの名譽職という側面が色濃く残されていたからだ。とは言え、第二次ティアマト宙域会戦以来、士官学校、および高級士官への門が広く平民にも開かれるようになったのも事実である。また、制式艦隊のすべてが帝都星を根拠地とする帝国軍の兵制上、士官の大半が帝都星への居住を義務づけられることになる。不満足とは言え、帝国軍が辺境星系の平民出身者を対象に官舎を整備したのは、ここ二、三〇年の間だった。今上皇帝フリードリヒ四世にとって、例外的な建設的治績として評されるのが、この帝国士官・下士官用官舎の建設である。およそ建設的な方面での功績を持たなかつた現皇帝にとって、皮肉極まる評論と言えた。

キルヒアイスの予測の範囲内だったのは、ラインハルトが官舎入りに否定の意を示したことだった。

「五年我慢したんだ。この上に我慢を続けるのは願ひ下げだ」

感情面もさることながら、ラインハルトは言う。周囲すべてが帝国軍の下級士官という環境は、ラインハルトの目指す覇業に対して大きすぎる障害要因となる恐れが大きい。

「士官に成り立ての、それも平民出身者だからな」

偏見で言っているのではないぞ、と付け加えたのは、やはり平民出身のキルヒアイスへの配慮だったのだらう。帝国騎士の身分を持つとは言え、ラインハルトの記憶の及ぶ限り、ミューゼル一家が平民の水準を超えた生活をしていたという事実はないのだ。

身分云々はともかく、キルヒアイスはラインハルトの指摘を首肯するにやぶさかではない。士官学校卒業後すく士官の通例として、帝国、つまりはゴールデンバウム王朝への忠誠心は、おそらくは門閥貴族出身

の若者よりはるかに強いはずなのだ。身分の壁を破り、能力次第で提督、果ては元帥として権門に連なる機会を与えてくれたのは士官学校であり、それを主宰する帝国政府である。無論、帝国軍での軍歴を重ねる内、そうした機会が昼間の空に星を見いだすほどの稀少な確率でしかもたらされ得ぬことを悟ることになるのだが。

ゆえにラインハルトは言つ。

「二四時間、そういう連中に囲まれていたら息が詰まるし、第一危険すぎる。そう思わないか、キルヒアイス？」

「ええ、そうですね。そうだとすると、どこかに下宿することになりませんが……」

あるアイデアを、キルヒアイスは言い出しかけて止めた。彼の実家の隣家、つまりミューゼル家は、まだその所有者を変えていないのだ。アンネローゼが後宮に納められた時、少なくとも数百万帝国マルクの支度金と、おそらくは少なからぬ年金を与えられたはずのだが、ヘル・ミューゼル、ラインハルトの父は廃屋も同然なあの家を動かさずしてはいないのだという。

『暴れるとか、変なことをするとかいうことはないんだけどねえ……』

母の溜息を、キルヒアイスは幾度と無く「デオ・レター」で聞いていた。

『朝からずつとお酒を飲んでるみたいで、あれじゃ、すぐに体を壊してしまつ。そう父さんと話しているのよ。あなたはまだまだと思うけど、お酒には気を付けなさい。兵隊さんは随分無茶な飲み方をするみたいだからね』

ラインハルトが父との同居を肯んじるはずもなく、と言ってヘル・ミューゼルがその様子ではキルヒアイス家への下宿も、ラインハルトの受け入れるところとはならないだろう。

「どこかに部屋を借りればいい。どうせ、すぐに宇宙に出るんだ。帰っ

てきた時に眠るところがあれば十分だ。それと、余り軍や貴族の連中が近くにいないようなところだな」

「ええ、そうですね……」

同意を示して頷いておき、キルヒアイスはラインハルトの思案の扉を控えめにノックしてみる。どの程度の住環境をラインハルトが望んでいるのか、と。

ラインハルトは束の間、言われている意味を理解しかねたようにキルヒアイスを見つめ、それから軽く肩を竦めるようにして笑った。

「心配性だな、キルヒアイス。俺が大邸宅に住みたいでも言つと思つたのか？」

「そうではないですが、基本ですからね」

「そうだな、二ベッド・ルームの部屋で十分だ」

「二ベッド・ルーム　ですか？」

「ああ、二人でシェアすれば家賃だって心配要らないだろう」

意外な言葉を聞かされて、キルヒアイスは目を瞠った。ラインハルトの口から出るとして『家賃の心配』などという言葉が聞かれるとは予想もしていなかったのだ。

キルヒアイスの表情に気がついたらしい。ラインハルトの笑顔が悪童のそれに変わった。

「下宿は策源地。策源地を維持する費用は兵站の基本だ。維持費、つまり家賃だ。そんなことに気がつかないようなやつが、戦場で勝利者になれるはずがない」

もっともだな、と頷きかけ、キルヒアイスは察する。これあるかな、我が金髪の親友。ラインハルトが前からそんなことを考えていたはずはない。考えていれば、官舎の話を出した時、あんなに啞然とした表情はしなかつたはずなのだ。つまりは、キルヒアイスの言葉から一瞬に戦略